

歴史を語る建物たち

庄内編
(第10回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

山王くらぶ（酒田市）



酒田市役所や百貨店「マリン5清水屋」などが建つ通りから、西側の日和山公園に続く一帯は、かつて料亭やスナックなどが建ち並ぶ酒田随一の繁華街であった。その一角にある「山王くらぶ」は、平成11年まで料亭として営業していたが、現在は市が所有する観光施設として、酒田まちづくり開発㈱が管理・運営を行っている。平成15年には国の登録有形文化財に指定された。

佐藤泰太郎が手掛けた 普請道楽建築

明治27年、庄内地域でマグニチュード7レベルの大地震が発生した。とりわけ、酒田の被害は大きく、地震後の火災も重なり、多くの家屋が倒壊、焼失した。そのため、重要な接待や商談などができる場所の再建が急務となり、翌明治28年、酒田市内で行商宿を営んでいた谷松宇八の土地（現在地）に、「山王くらぶ」の前身となる料亭「宇八樓」が建てられた。棟梁は、日和山六角灯台や相馬屋（現在の相馬楼）などを手掛けた、酒田出身の名工・佐藤泰太郎である。

当時の資料がほとんどないことから、多くは憶測に頼らざるを得ないが、「宇八樓」は、簡素な造りの中にも随所に贅を尽くしており、谷松が建築費を独力で工面できたとは考えにくい。いわゆる普請道楽（好事家や趣味人が、蓄財を建築に費やしたり、次々に住まいなどを建て替えたりすること）として建てられた可能性もある。



大正10年に酒田を訪れ、宇八樓の座敷でつろぐ竹久夢二（中央）。昭和初期に大改修が行われたため、現在のどの部屋なのか特定は難しいという（山王くらぶ談）。
出典：ふるさとの思い出写真集「酒田」（国書刊行会）

「山王くらぶ」の運営スタッフを務め、昇僊の歴史にも詳しい木村幾子さんは、「谷松宇八は地元でも信頼のおける人物だったと聞いています。それで、周りの人たちが谷松にお金を貸して、料亭の経営を打診したのかもしれない」と話す。

竹久夢二が逗留

料亭「宇八樓」と最もかわりの深い著名人は、おそらく竹久夢二（明治17年－昭和9年）だろう。

美人画で一世を風靡し、大正ロマンを代表する画家である夢二は、同時に旅人でもあった。酒田には生涯に3度訪れ、宇八樓では、普段はあまり使われない茶室に寝泊まりをしていた。当時は館内に風呂場もあり、文字通り逗留が可能であった。夢二は、宇八樓で画会を開いたり、象潟へスケッチ旅行に出かけたりしている。また、昭和2年の都新聞（東京新聞の前身）に長期連載された自伝絵画小説『出帆』では、「酒田は殊に好きだった。（略）庄内なら余生を送るのに不足のない土地だ。」と書いている。夢二の旅先の中でも、酒田がお気に入りだった様子がうかがえる。

しかしながら、わが国で次第に戦時色が濃くなると、酒田市臨海部の大浜工業地帯に工場を構えていた鐵興社（東北東ソー化学の前身）が規模を拡大したことから、宇八樓は昭和16年、同社の男子独身寮となった。

戦後、宇八樓は人手に渡り、昭和21年、「山王くらぶ」として料亭を再開した。このとき、木彫り看板の文字を書いたのが、評論家・佐高信氏の父親である佐高兼太郎である。兼太郎は、「菫舟」の雅号を持つ酒田の書家で、とりわけ仮名を得意とした。信氏は、そうした出来事を知らなかったらしいが、後年、山王くらぶを訪れた際に、「これは親父の文字ではないか」と、すぐに気が付いたそうである。

市役所職員が利活用を考えた

料亭文化の斜陽化の波にはあがえず、山王くらぶは平成11年に休業した。平成15年には国の登録有形文化財に指定されたが、維持管理が大変なことから、平成17年に所有者から酒田市に寄付された。当時の酒田市の担当者で、現在は酒田まちづくり開発㈱の総支配人を務める本間博さんは、「この建物をなくしてはいけない」と、喜んで引き受けた」と、当時を懐かしむ。

企画展示など、建物の利活用については職員が知恵を絞った。これは察するに、寄付を受けた市が自ら再生させることで、建物に愛着と責任感を持たせる狙いがあったのではないだろうか。

かくして平成20年、市の観光施設「山王くらぶ」がオープンした。ユニークなのは、2階の一室を、酒田商工会議所女性部で構成する「傘福くらぶ」の活動拠点にしていることだ。酒田の傘福は「日本三大つるし

飾り」の1つともされる伝統細工で、予約なしでも制作体験が可能である。木村さんは、「いろいろな方が建物を利用されることで、館内に活気が出る」と、その効果を強調する。

なお、平成25年から、酒田まちづくり開発㈱が市の指定管理者として管理・運営に当たっている。「現状を保持しながら利益を上げるのは大変です」と木村さんは話す。実は、全国的にみると、解体等によって登録有形文化財を抹消されたケースが少なくない。山王くらぶが、所有者から酒田市、そして指定管理者によって今後も残されていくことに期待したい。

空間を楽しんでほしい

木村さんは、山王くらぶの魅力を「ありのままの姿で、居心地がいいこと」と話す。実際、喫茶室で2時間ほど読書するだけで帰るお客さんもいるという。「自分の家のように、リラックスして“空間”を楽しんでほしい」と語る木村さん。有名人がひょっこり訪ねてきて驚くこともあるそうだが、リラックスできるように、あえて特別なもてなしはしないそうだ。筆者も、どんな有名人が来たのか教えてもらえなかった。山王くらぶなりの配慮なのだろう。

一方で、ツアーなどの団体客には、たとえ短時間であっても最大限のもてなしをする。その理由について木村さんは、「ツアーで来られたお客様は、たまたまここがルートに盛り込まれていたから来られたかもしれません。しかし、せっかく縁あって来られたのですから、気持ちよくお帰りいただき、1人でも2人でもリピーターになってくれたらいいと思います」と語ってくれた。お客に「こんな素晴らしい建物があるとは知らなかった。ぜひ残してほしい」と言われるのが、何よりうれしいという。

そういえば、取材を終えて帰る筆者を、木村さんは、表通りから見えなくなるまで見送ってくれた。どうやらここにもリピーターが1人増えたようだ。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



玄関先に今も大切に残されている、料亭時代の木彫り看板。文字は「菫舟」の雅号を持つ書道家・佐高兼太郎によるもので、評論家・佐高信氏の父親である。（筆者撮影）